

西園寺公望のフランス語蔵書

—その2 陶庵文庫—

奥村 功

1. はじめに

さきに筆者は、立命館大学図書館所蔵の「西園寺文庫」について、「西園寺公望のフランス語蔵書」と題する文章を記した¹⁾。この稿はそれにつづくものである。

稿の最初に断っておかねばならないことがある。前稿で、筆者はこう述べた。「西園寺の蔵書は、……「西園寺文庫」にその全容をほぼ見ることができる。ただし、漢籍の大きな部分は京都大学図書館に収まっている。また、西園寺の別邸坐漁荘が移築された明治村にも若干の手沢本が保存されている²⁾」。しかし、稿の発表後に教示をうけたところによると、このただし書きは正確ではなく、洋書に限っても西園寺の旧蔵書は西園寺文庫以外にあちこちに所在する。すなわち、第1に、京都大学附属図書館には漢籍が中心ではあるがそれだけではなく和書洋書も相当数蔵されている。第2に、明治村に保存されている図書は「若干」の範囲に収まらない規模というべきであること、である。こうした各地の蔵書について言及しながら、十分な確認を怠ったのはまったく筆者の迂闊というほかはない。

ただし書きが正確でなければ、その前の文も成り立たなくなる。すなわち、「西園寺の蔵書は、……「西園寺文庫」にその全容をほぼ見ることができる」とするのは言い過ぎで、正しくは「西園寺の蔵書は、……「西園寺文庫」とその他各地の蔵書をあわせ見ることによってその全容をつかむことができる」と言うべきであろう。

申しそえておきたいが、西園寺旧蔵の洋書が「西園寺文庫」以外のどこかに相当数ありうることを筆者が想定しなかったわけでは、もちろんない。前稿のいくつかの箇所での可能性について言及しており³⁾、そうした疑問は今では氷解した。

前稿での筆者の記述は、「西園寺文庫」中の洋書の紹介、検討としては成り立っても、西園寺所蔵の洋書の全容はそれではわからないと言わねばならない。中途半端な紹介のためにまちがった西園寺像をつくることにもなりかねない。西園寺旧蔵のフランス書の全容をつかむために、乗りかかった船で、各所に所在する旧蔵書の検討を、いましばらく自分の仕事としてみようと思う。

1) 「立命館経済学」第46巻第6号（奥村剋三教授退任記念論文集）（1998年2月）。

2) 前掲号 p. 208.

3) 前掲号 p. 210, 末尾から2行目。p. 223, 5. の9行目。

2. 「陶庵文庫」のあらまし

西園寺の雅号を冠し、その旧蔵書から成る陶庵文庫が京都大学にあることはよく知られている。京大にはそのほかに明治年間に西園寺から寄贈された一連の図書があるが、これについては紙幅の都合から次の機会にゆずり、ここでは陶庵文庫のフランス書の検討をおこなうこととする。

陶庵文庫については刊行された目録はなく、その全体をつかむには書名カードを検索するしかない。書名カードの最初には、「文庫」の簡単で要をえた説明があり、西園寺と京都大学とのかわかりが理解できる。その概要の紹介のために便宜、説明をそのまま引くと、「本文庫は本学創設当時の文部大臣としてその設立に尽力した西園寺公望の所蔵本であった和漢洋にわたる書籍であって嗣子西園寺八郎が本学創設委員であった西園寺公望の歿後その別邸である清風荘と共に本学に寄贈したものである。その冊数は680部8046冊である」。全体が貴重書の扱いになっており、閲覧には相応の制限がある。

和漢洋の内訳について正確な数字は示されていない。書名カードの厚さだけで見れば、漢籍がおよそ5分の3、和書と洋書がそれぞれ5分の1といった見当であろう。どの本にも「陶庵文庫」と「西園寺八郎寄贈」の印が押され、受入れの日付はすべて昭和19年12月28日となっている。洋書の部数冊数を書名カードであたると、122部207冊になる。¹⁾

漢和洋の順の洋の部は、ⅠからⅤの5群に大別され、さらに著者名のアルファベ順に番号が付されている。5群の区別がどういう基準によっているのか必ずしも明瞭でないが、おそらくⅠは総記政治法律社会、Ⅱは文学、Ⅲは歴史伝記地理、Ⅳは芸術、Ⅴは言語、雑ということであろうか。しかし、そうだとすれば、分類の過誤もかなりあることになる。いずれにせよ、蔵書の検討にあたっては、部門をすっきり組立てなおしたうえで、刊行年の順に内容ごとの整理をすることが必要になる。

洋書のほとんどは、書かれた言語でいえばフランス語、でなければ、フランス語日本語併用である。もちろん、古典あるいは外国の著作のフランス語訳も多く含む。英語の本は7部、ドイツ語は1部に過ぎず²⁾、全体として、陶庵文庫の洋書をフランス語蔵書と呼んで問題はなく、フランス書の比は西園寺文庫におけるよりも大きいと言える。

陶庵文庫の蔵書はどの時期に形成されたのだろうか。刊行年次が18世紀、あるいは19世紀前半の古書がそれぞれ2、3件含まれ、さらに前世紀末、今世紀初頭の刊年もいくらか見られるけれども、刊本がぼつぼつ多くなるのは一次大戦の時期、すなわち1910年代後半あたりで、中心の時期は20年、30年代である。下限は、西園寺が歿する前年の1939年である。したがって、蔵書の内容は西園寺文庫より新しく、西園寺の晩年期にあたると言える。西園寺文庫はこの時期の刊本をほとんど欠いており、二つの文庫はその形成の時期を違えて、あい補うものと言えよう。陶庵文庫の収集経路を推測するなら、多くは西園寺自身、あるいはまわりの人が公のために海彼から取り寄せたものと思われ、それにフランスおよび日本国内からかなりの寄贈が加わる。

陶庵文庫が、清風荘と同時に京大に寄贈されたことから、これらの図書は寄贈の前には清風荘に置かれていたかと自然に想定したくなるが、文庫の収書の中心的な時期は、西園寺の清風荘時

代（1913-1918）とは、ずれる。西園寺はその時期にも東京駿河台には邸宅をもち、1920年（大正9年）以降は興津の坐漁荘にとどまるから、あちこちにあった図書が歿後の整理を経てここに寄ったと見るべきではないだろうか。

図書の部門ごとの検討の前に、文庫の全体の特色をざっと個条に示しておこう。

1. 専門的学術書に類するものはほとんど含まれないと言ってよいが、西園寺の人柄を映して、社会（とりわけ国際情勢）、歴史、文芸、芸術、社交の心得などにわたる、教養人としての広い関心を示す。しかし、そのなかで蔵書の中心は列強をめぐる国際情勢と、いまひとつは公自身が接した欧州の為政者の事蹟への関心と言いうるのであろう。また、蔵書中にフランスの年鑑、あるいは語学辞書のような参考図書も備えられていることでわかるように、たんなる好事家の読書ではない。以上は西園寺文庫にも共通する特色である。ただし、伝記への嗜好はよりあらわであるように見える。
2. 西洋人による日本研究あるいは日本への関心、日本人によるフランス研究の成果をとどめようという意欲が、書籍から小冊子にわたる収集にうかがわれる。
3. 文芸書はさほどの点数ではなく、西園寺文庫に見られたような、まとまった数の演劇台本といった特色もないが、さすがに所蔵者の趣味をうかがわせるものがある。西園寺文庫と比べれば、ギリシャ・ラテンの古典のフランス語訳も多い。
4. 趣味的な書籍の点数は多くないが、フランス美術通史や19世紀パリについての一級の著作が備えられている。
5. 老年期の収書のせいか、紙ナイフの入っていない図書も散見される。文字の書き込みは、西園寺文庫でもそうであったが、皆無に近く、ただ注目をした箇所に縦に一線を、あるいは下線を薄く青や赤の鉛筆で入れることが僅かにあるのみである。

前稿では時期ごとに収書のあとを追ったが、ここでは蔵書の年代はほぼ晩年に限られるので、部門ごとの検討を主に記述をすることとする。文庫の概要がつかめるように、本文あるいは註において和洋を適宜に使いわけつつ、主だった書名をざっと掲げる。書誌的な説明は、京都大学付属図書館のカードの書式を範にするが、紙幅の都合でやや簡単にし、³⁾ ときに記述をととのえ、必要な修正をはかった。なお、註のそれぞれの最初の〔 〕は陶庵文庫に付けられた分類番号である。

- 1) この部数、冊数は、西園寺文庫（173件、199冊。ほかに目録からの脱落が4件（4冊）ある）とまらず同様の規模と言えよう。両文庫で、部（件）数の数えかたもやや異なる。
- 2) ほかに、和英、仏英2カ国語のものがそれぞれ1部ある。
- 3) 訳者名や、図版、地図などの指示はあらかた省略した。

3. 国際情勢をめぐる図書

陶庵文庫の主な部分は、1次大戦後の時局にかかわる著作である。大戦の通史、あるいはその原因究明といった近接した部門をも合わせれば、ざっと全体の5分の2、約50部くらいか。しかし、当然ながら、もっとも時代を映す部分と言えよう。おおかたは Payot, Plon といった出版社からの刊行である。

前稿において、「西園寺のフランス語蔵書は、1900年以降しばらくして初めて公人としての政治的関心をはっきり示すようになったと言いうるだろう¹⁾」と、それ以前の時期と対比して述べた。その政治的関心は20年、30年代でも変わらないことが陶庵文庫において瞥見される。

大戦が終るか終らないかの時期に早くも、大戦の経験を通じてヨーロッパ社会をどう再建するか、さまざまな提言がなされている。ギュスターヴ・ルボンの著作²⁾は西園寺に親しいものであった。熱気をはらんだ『創造』³⁾ 2巻(1919)の著者エドゥアール・エリオも、西園寺にとって関心をひかれる人物であったはずである。すこしあとのものでは、アンドレ・シェラダム『ヨーロッパ混乱の真因』⁴⁾(1924)といった本も挙げられる。

大戦の裏面史、回想、あるいは通史と、さまざまな著作が各国で出され、フランス語訳も刊行される。出版社 Payot からの「世界大戦史に資するべき、回想、研究、資料叢書」⁵⁾に入っている書籍は、文庫に4部数えられる。おなじ版元から、そのほかに「われわれの時代の歴史に資するべき、研究、資料、証言叢書」⁶⁾という類似の叢書もある。

講和会議において日本を代表した立場からも、西園寺がそうした文書に相当の関心をもって接したことが想像されるが、それらのなかで逸してならない大著はウィンストン・チャーチルの『世界の危機』⁷⁾ 全4巻(1925-1931)であろう。さらに、ウィルソン大統領の腹心ハウス大佐(1858-1938)の『内幕文書』⁸⁾(1930)もある。ヨーロッパがどうして大戦にひきこまれたか、大戦の原因は公望の切実な関心事であったと思われるが、書架に残る政治家の回想、書簡の類も、たんに同時代人である政治家の事蹟への関心にとどまらず、大戦にいたる経緯をさぐる資料として求められたのであろう。たとえば、まずドイツ皇太子の回想録⁹⁾(1922)。さらに、ドイツの元宰相ビューロー〔1次大戦の際には政治に復帰して、一大使としてイタリアにおいて外交工作をおこなう〕の長大な4冊の回想録¹⁰⁾(1930-1931)、あるいはそのウイヘルム2世との秘密書簡¹¹⁾(刊行年なし)。

ドイツの首相としてヴェルサイユ条約調印を拒否したフィリップ・シャイデマンが著した『崩壊』¹²⁾(1923)は、開戦から共和政宣言、講和、調印拒否、辞任までを内側から叙述しており、数多い青の符号が熟読の跡を示している。K.F.ノヴァック『革命の裏面 1918年11月のドイツとオーストリー』¹³⁾(1927)もやはり同時代史の資料である。

フランスを勝利にみちびいた首相クレマンソーは、西園寺にとっては40年前アコラス塾での旧友であったが、彼の著書が2部¹⁴⁾、彼をあつかった著作が3部¹⁵⁾と、これは個人的な関心がくわわって、網羅するわけではないが数多く集められている。著書のうちの『ひとつの勝利の偉大と悲

惨』(1930)〔Ⅲ．C5〕は、著者が歿した翌年に出たものだが、西園寺にとってはまさしく待ち望んだ一書であったろう（文庫は、この本をおなじ版で計4冊収めている）。その第9章「講和会議」には各国代表の簡単な人物描写が見られるが、そこでの西園寺の品評はよく引かれるものである。¹⁶⁾

ウィリアム・マーティン『大戦期の政治家たち』(1929)は、西園寺にとっては同時代の、欧米の主だった政治家23人の人物列伝で、会議で同席した顔も多い。綺羅星と居並ぶ各国首脳の最後に、いわば真打のあつかいでクレマンソーは登場する。暢達の筆致で西園寺には興深い読み物であったのだろう。随所に青赤の鉛筆で印がつけられている。

戦後の時日の経過とともに、列強の新たな動きについての観察が手元にとどく。とりわけ、20年代は新しい国家であるソ連について。30年代はまたもや世界の脅威となったドイツについて。それら一連の著作のなかでも早い時期に、ふたつの国家体制を比較する一本が出ていて、これには珍しく西園寺のものらしい色鉛筆による書き込みが多く、熱心な披見のあとがうかがわれる。すなわち、カミーユ・エマール『ボルシェヴィズムか、ファシズムか？ ……フランス人よ、選択を！』(1925)というファシズム称揚の書である。¹⁸⁾

これらの著作の内容を把握し、それらから西園寺がどういう情報を得たかを推測することはもとと筆者の手にあまる上に、陶庵文庫が貴重書の扱いであることから、十分に時間をとった閲読はむつかしくもある。しかし、その内容が多岐にわたり、さまざまな立場の著作を含んでいることは、著者名、書名などからも容易に察せられる。

革命後まもなくの著作では、ジュネーヴの国際労働局〔国際連盟の専門機関のひとつである国際労働機関（略称ILO）の事務局〕編纂の『ソヴィエト・ロシアにおける労働条件 ロシアにおける調査団のために準備された、体系的質問票および書誌』(1920)、あるいは、ロシア宮廷に仕えたフランス人ジリアルによる『ニコライ2世とその一家の悲劇的な運命』(1922)など。¹⁹⁾

反ソヴィエトの立場から書かれた、ミハイル・フェドロフ監修『共産主義体制下のロシア 英国労働組合使節団報告に対する、ソヴィエト公式資料にもとづく反論』(1926)は、ヨーロッパ各地の亡命者グループによる大部な著作である。監修者はこの本の企画編集委員長で、帝政政府の元大臣であった。24年11、12月に視察をおこなった一行の報告が正確な観察にもとづいていないことが著作執筆の動機だと、序言の冒頭にはある。ヴァシリ・シュルギン『ロシアの復活 ソヴィエト・ロシア秘密旅行』(1927)は、半ば読まれているだけだが、元ロシア国会議員が革命後に潜入しての実見記。帝政期に首相(1911-14)や蔵相を務めたココフツォフ(1853-1943)による新体制への批判『ボルシェヴィキの実態 ソヴィエト国家における道徳、政治の荒廃』(1931) (R.ポワンカレが序文を書いている)。²⁰⁾

片や、ソ連への共感を示すフランス左翼人の著書も見られる。リュシアン・ロラ『ソヴィエト経済 力学と構造』(1931)、とくに反教権主義の旗幟が鮮明なルネ・マルテル『ソ連における反宗教運動(1917-1932)』(1933)。あるいは、トロツキー『わが生涯』(第1巻1929)も。²¹⁾

ロシアへの関心は社会主義革命とソヴィエトに限るわけでは必ずしもないのか、アレクサンドル3世時代の政治家ポベドノスツェフ(1827-1907)による大冊『ロシアの専制』(1927)も見当てる。ただし、ページは切られていない。²²⁾

ロシアに関する著作のなかに一冊、1781年刊行の古書がまじっている。ウィリアム・コックス（1747-1828）の英語の著作『アジアとアメリカ間の、ロシア人による新しい発見のいろいろ。付シベリア征服、およびロシア人と中国人の通商の歴史²⁸⁾』の仏訳（1781）である。おそらくは稀覯の書と言えるのだろうが、あるいはシベリア、樺太出兵（1918-1925）と関って、歴史への好奇心から架蔵されたものであろうか。

ドイツに関する図書の多くは反ナチスの立場に立つものである。まず、アルベール・リヴォ『ドイツの危機 1919-1931²⁹⁾』（1932）。著者（1876-1956）はソルボンヌの哲学教授、政治学自由学院教授。ナチスとの関係は微妙で、のちにヴィシー政権の文部大臣に任命されるが、戦前に出版したドイツに関する著書のためにドイツ政府の反対を受け、すぐに任を解かれたという。

F. W. フェルスター『ヨーロッパとドイツ問題³⁰⁾』（1937）。序のあとの長い著者紹介によると、1869年生まれの哲学者である著者は大戦を通じて平和主義の信念を強め、そのために1920年ミュンヘン大学を追われてスイスに住む。のち、ヒトラー政府は彼の著書を禁書にする。

『スペインにおけるヒトラー³¹⁾』（1938）という本もあるが、O. K. シモンという著者名は、あるいは仮の名でもあろうか。ヘルマン・ラウシュニング『ヒトラー対話録 世界征服計画について 総統が話したことども³²⁾』（1939）の著者（1887-1982）の方は、ナチスの離反者としてよく知られている。

ナチス派の文書とみなせるのは、ブリュッセルで出版されたM. ラロワール『新しいドイツ社会、経済改革³³⁾』（1935）くらいである。ただ、読書の跡はない。

フランスや英米の政治状況については資料はすくなく、若干見当たるのみである。アンドレ・シーグフリードの名を知らしめた『今日の合衆国³⁴⁾』（1928年版）、『フランス政党図³⁵⁾』（1930）。ドゥラートル『戦後のイギリスと石油紛争 1919-1926 社会心理の研究³⁶⁾』（1930）、講演集『英国のかかえる諸問題³⁷⁾』（1936）。ウォール街のパニックをアツクつたアルペロヴィッチの論文『1929年アメリカの株式危機³⁸⁾』（1931）。ウラジミール・ポズネール『離散した合衆国 ルポルタージュ³⁹⁾』（1938）。

国家単位でなく、世界経済をあツクつたものでルネ・ジロー『経済の世界協調へ⁴⁰⁾』（1931）は左派の出版物に分類されるであろうが、西園寺の関心を惹いたようだ。資源の面からも国家の壁をなくし、経済協調の必要を説いている。

ヴェルサイユ条約によって発足した国際連盟の進展に西園寺はそれなりの期待を寄せていたであろうが、その機関のひとつである知的協力国際研究所（2, rue de Montpensier, Paris 1er）の刊行物がいくつか見当たる。それらは国際情勢に直接にかかわるものではないが、ここであわせて触れることとする。

ひとつは、活動報告『知的協力年鑑1933年版⁴¹⁾』（1934）。これには、2枚の事務書類が挿入されている。註に示すような書込みが余白にある。文面からすると、研究所への日本からの協力があろうよう西園寺の口添えを期待しているのであろう。

もう1冊の『ローマ文字の世界における採用⁴³⁾』（1934）は、ページが切られていないが、文庫整理の際に、封筒上書が中に残されている。本の序文には、田中館教授の提言により、この問題が委員会の検討に上った旨が記されている⁴⁴⁾。西園寺の書簡には田中館愛橋宛の短信1通（大正6

(1917)年(？), 京都発信)があり, 近年完結した『西園寺公望伝』⁴⁵⁾に見ることができる。日本語の表記について, その時点での意見を西園寺は「右不取敢及御答候」とごく簡潔に述べている。なお, この『ローマ文字の世界における採用』は, 明治村に寄贈された図書のなかにも見当たる。

- 1) 「立命館経済学」第46巻第6号(奥村剋三教授退任記念論文集)掲載, 奥村 功「西園寺公望のフランス語蔵書」p. 217, ll. 7, 8.
- 2) [I. B 3 sic]
Le Bon, Gustave: Hier et demain: pensées brèves. Paris, Flammarion. 1918. 252 p. 12° (Bibliothèque de philosophie scientifique).
- 3) [III. H 4]
Herriot, Edouard: Créer. Paris, Payot. 1919. 12° 2 vol. — T. 1: 478 P. — T. 2: 346 p.
- 4) [III. C 1]
Chéradame, André: Les vraies raisons du chaos européen. Evreux, Ch. Hérissey. 1924. 418 p. 12°.
以下の個所に下線が見られる。p. 201には「不幸なことに, 本当にドイツを知っているフランス人はごく少ない。無能の崇拜がフランスには申し分なくゆきわたっており……」。p. 204には, シェラダムがドイツの力はとりわけその精神力にあると書いた上で, C. G. T. のある書記長が以前に述べた言葉を予言的だとして引いているところにも。「20年後にはドイツはヨーロッパの支配者になるだろう。哲学を持っているから」。また p. 206には, フランスの指導者が認識不十分であった, 1870年以降のドイツ発展の3大事実, その第1として「農業, 工業, 商業が徹底して科学的になっていたこと」。
なお, シェラダムの著書 *Le plan pangermaniste démasqué. Le redoutable piège berlinois de la partie nulle* (1916) は, 『仮面を剥がれたる汎独政策』の名で外務省臨時調査部により1918年に日本語版が出されている(原書, 訳書とも西園寺文庫に架蔵)。
- 5) Collection de mémoires, études et documents pour servir à l'histoire de la Guerre mondiale.
- 6) Collection d'études, de documents et de témoignages pour servir à l'histoire de notre temps.
- 7) [I. C 2]
Churchill, Winston S.: La crise mondiale. Ouvrage traduit de l'anglais. Paris, Payot. 8° 4 vol. — T. 1: 1911-1915. 447 p. 1925. — T. 2: 1915. 433 p. 1928. — T. 3: 1916-1918. 600 p. 1930. — T. 4: 1919. 454 p. 1931. (Collection de mémoires, études et documents pour servir à l'histoire de la Guerre mondiale). 原著名は *The World crisis*. (1923-1929刊行)
- 8) Seymour, Charles. éd.: Papiers intimes du colonel House. Paris, Payot. 8° T. 3: Dans la Guerre mondiale. 489 p. 1930. (Collection de mémoires, études et documents pour servir à l'histoire de la Guerre mondiale).
全4巻(1927-31)のうちの第3巻。セイモアはイエイル大学の歴史教授。ほかにもハウス大佐との共著による講和会議の裏面史がこの叢書に収められている。
- 9) [III. M 6]
Mémoires du Kronprinz. Ouvrage traduit de l'allemand. Paris, Payot. 1922. 310 p. 8° (Collection de mémoires, études et documents pour servir à l'histoire de la Guerre mondiale).
- 10) [III. M 6]
Mémoires du chancelier prince de Bülow. Ouvrage traduit de l'allemand. Paris, Plon. 8° 4 vol. — T. 1: 1897-1902. Le Secrétariat d'Etat des Affaires étrangères et les premières années de chancellerie. 494 p. 1930. — T. 2: 1902-1909. Du renouvellement de la Triple jusqu'à sa démission de chancelier. 525 p. 1930. — T. 3: 1909-1919. La Grande Guerre et la débâcle. 346 p. 1930. — T. 4: 1849-1866. Sa jeunesse et sa carrière de diplomate. 527 p. 1931.
この刊行順は原著にならったもの。

大戦を扱った第3巻 p. 249 にビューローは、ドイツの社会主義者の代議士 Stroebel が「ドイツの勝利は社会主義者の利益にはならぬ」と発言したが、連合国側にはこんな発言は極左にもなかった」と述べているが、その横に青鉛筆で「Bulow *sic* 獨の壓制をしらず」と読める。

11) [III. C 10]

Correspondance secrète de Bülow et de Guillaume II, réunie par Spectator. Ouvrage traduit de l'allemand. Paris, Bernard Grasset. [Sans date] 265 p. 8°.

書簡は1903年12月27日から、ビューローが首相を辞任する1909年9月25日までで日露戦争裏面史に関わる記述を多く含む。

12) [I. S 5]

Scheidemann, Philipp: L'Effondrement. Paris, Payot. 1923. 279 p. 8° (Collection de mémoires, études et documents pour servir à l'histoire de la Guerre mondiale).

13) [III. N 1]

Nowak, Karl Friedrich: Les dessous de la révolution; l'Allemagne et l'Autriche en novembre 1918. Ouvrage traduit de l'allemand. Paris, Payot. 1927. 342 p. 8° (Collection de mémoires, études et documents pour servir à l'histoire de la Guerre mondiale).

著者のもう1冊 Les dessous de la défaite (「敗北の裏面」) (1925) も、Payot 社のおなじ叢書に収められている。

14) [II. C 2]

Clemenceau, Georges: Démosthène. Paris, Plon. 1926. 125 p. 12° (Nobles vies-Grandes oeuvres).
[III. C 5]

Clemenceau, Georges: Grandeurs et misères d'une victoire. Paris, Plon. 1930. 374 p. 8°.

C 5 から C 8 までの4冊。うち6, 7はページが切られていない。なお、まったく些細なことだが、4冊のひとつに小さな紙切りナイフを見つけた。やや厚いクラフト紙のもので、デザインからすれば1920あるいは30年代か？ 誰かから貰って園公が用いたかも知れない。黒地でなんの変哲もない。片面に金で栓抜きを描き、もう一面に花文字で縦に NICOLAS と酒屋のチェーン店の名。隅に小さく Draeger と有名な印刷店の名が刻まれている。酒屋の景品だが、なかなか瀟洒である。しかし、あるいは後世の閲覧者の忘れものであるかも。

15) [III. L 4]

Lecomte, Georges: Clemenceau. Paris, Charpentier, 1919. 296 p. 12°.

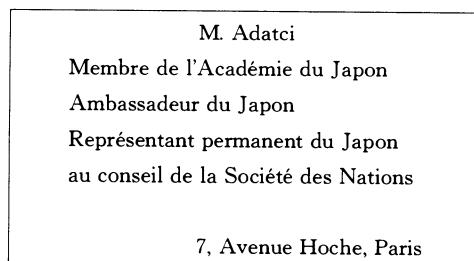
[II. M 3]

Martet, Jean: M. Clemenceau peint par lui-même. Paris, Albin Michel. 1929. 16 p. 12°.

[III. M 3]

Martet, Jean: Le silence de M. Clemenceau. Paris, Albin Michel, 1929. 316 p. 12°.

フランス駐在大使、国際連盟理事会日本代表安達峰一郎(1869-1934)からの受贈であろう。安達の大使任期は1928年2月から30年2月。つぎのような名刺が挟まれている。

16) 《L'aimable prince Saionzi, jadis impétueux, aujourd'hui doucement ironique, mon ancien camarade au cours du professeur de droit Emile Accollas *sic*.》(p. 126).

「にこやかな西園寺公。かつては血気さかんであったが、今はおだやかな皮肉屋。わたしにとって
は、法学教授エミール・アコラスの講義の同窓生だ。」

17) [III. M 4]

Martin, William : Les Hommes d'Etat, pendant la guerre. Paris, Horizons de France, 1929. 382 p. 8°.

著者はスイスのジャーナリストで、『ジュネーヴ新聞』を編集。

18) [I. A 1]

Aymard, Camille : Bolchévisme ou fascisme ? ... Français il faut choisir !. Paris, Flammarion. 1925. 296 p. 12°.

19) [I. I 1]

International labour office, Geneva : Labour conditions in Soviet Russia ; systematic questionnaire and bibliography prepared for the mission of enquiry in Russia. London, Harrison, 1920. 294 p., cxliv p. 8°.

20) [III. G 1]

Gilliard, Pierre : Le tragique destin de Nicolas II et de sa famille. Treize années à la cour de Russie (Peterhof septembre 1905 - Ejaterubviyrgm novembre 1918). Paris, Payot. 1922. 264 p. 8°.

この本には2種の呈辞があり、2つ目の宛名は Monsieur Thabata とある。ニースに亡命中のロシア貴族の女性がフランス語で記したもので、判読はやや厄介だが来歴は興味をそそる。ふたりの夫のひとりとは銃殺、もひとりとはモスクワに囚われの身とある。

21) [I. F 2]

Fedoroff, Michel : La Russie, sous le régime communiste. Réponse au rapport de la Délégation des tradeunions britanniques, basée sur la documentation officielle soviétique. Paris, Nouvelle Librairie Nationale. 1926. 574 p. 8°.

22) [III. S 1]

Schoulguine, Vassili : La résurrection de la Russie : mon voyage secret en Russie soviétique. Ouvrage traduit du russe. Paris, Payot. 1927. 298 p. 8°. (Collection d'études, de documents et de témoignages pour servir à l'histoire de notre temps).

23) [I. K 2]

Kokovtsoff, W. : Le bolchévisme à l'oeuvre. La ruine morale et économique dans le pays des Soviets. Paris, Marcel Giard. 1931. 378 p. 8°.

ココフツォフは長い亡命生活をパリで終えた。

24) [I. L 2]

Laurat, Lucien : L'Economie soviétique, sa dynamique son mécanisme. Paris, Librairie Valois. 1931. 249 p. 8° (Bibliothèque économique universelle).

25) [III. M 1]

Martel, René : Le mouvement antireligieux en U. R. S. S. (1917-1932). Paris, M. Rivière. 1933. 232 p. 12°.

26) [III. T 1]

Trotsky, Léon : Ma vie, essai autobiographique. Ouvrage traduit sur le manuscrit par Maurice-Parijanine. Tome 1. 1879-1905. Paris, Rieder. 1929. 271 p. 8°.

全3巻(1930)のうち。Tome 2. 1905-oct. 1917. Tome 3. oct. 1917-fin 1929.

27) [I. P 2]

Pobiédonstsev, Constantin (Auteur présumé) : L'autocratie russe. Konstantin Petrovitch Pobedonostsev, procureur général du Saint-Synode. Memoires politiques, correspondance officielle et documents inédits relatifs à l'histoire du règne de l'empereur Alexandre III de Russie (1881-1894). Paris,

- Payot. 1927. 665 p. 8° (Bibliothèque historique).
- 28) [III. C 9]
Coxe, William : Les nouvelles découvertes des Russes, entre l'Asie et l'Amérique, avec l'histoire de la conquête de la Sibérie, & du commerce des Russes et des Chinois. Ouvrage traduit de l'anglais. Paris, Hôtel de Thou. 1781. xxii - 314 p. 4 cartes et 1 pl. 4°.
- 29) [III. R 1]
Rivaud, Albert : Les crises allemandes (1919-1931). Paris, Armand Colin. 1932. 218 p. 16°. なお、リヴォには、ほかにドイツに関する講演録（1933）がある。
- 30) [I. F 1]
Foerster, Friedrich Wilhelm : L'Europe et la question allemande. Ouvrage traduit de l'allemand. Paris, Plon. 1937. 372 p. 12°.
- 31) [III. S 3]
Simon, O. : Hitler en Espagne. 5e éd. Paris, Denoël. 1938. 265 p. 12°.
- 32) [III. R 2]
Rauschnig, Hermann : Hitler m'a dit, confidences du führer sur son plan de conquête du monde, avant-propos de Marcel Ray. Paris, Coopération. 1939. 320 p. 16°.
- 33) [III. L 1]
Laloire, Marcel : Nouvelle Allemagne : réformes sociales et économiques. Bruxelles, L'Édition universelle. 1935. 272 p. 12°.
- 34) [I. S 3]
Siegfried, André : Les Etats-Unis d'aujourd'hui. Paris, Armand Colin. 1928. 357 p. 8° 4e éd. (Bibliothèque du musée social).
初版は1927年。なお、陶庵文庫には、ほかに第9版がある [I. S 4]。
- 35) [III. S 4]
Siegfried, André : Tableau des partis en France. Paris, Bernard Grasset. 1930. 245 p. 12° (Les "Ecrits" sous la direction de Jean Guéhenno) ほかに版があり [III. S 5], 239 p..
- 36) [I. D 2]
Delattre, Floris : L'Angleterre d'après-guerre et le conflit houiller 1919-1926 Etude de psychologie sociale. Paris, Armand Colin, 1930. 424 p. 8°.
- 37) [I. P 1]
Problèmes britanniques : conférences organisées par la Société des anciens élèves et élèves de l'École libre des Sciences politiques. Paris, Félix Alcan. 1936. 238 p. 12°.
フランスでの英国通の外交官、軍人、文学者などによる連続講演。シーグフリード、モーロワなどの名が見当たる。
講演を催した政治学自由学院は1871年に創設され、戦前まで存続した私立学校。官僚養成の場であった。シーグフリードも長くここの教授で、当時なおその地位にあった。
- 38) [III. A 1]
Alperovitch, Paul : La crise boursière américaine de 1929. Paris, Librairie de jurisprudence ancienne et moderne Duchemin, 1931. 185 p. 8°.
- 39) [II. P 3]
Pozner, Vladimir : Les Etats-désunis. Reportage. Paris, Denoël. 1937. 308 p. 12°.
この書名は、もちろん Les Etats-Unis をもじったものである。
- 40) [I. G 1]
Giraud, René : Vers une internationale économique. Paris, Librairie Valois. 1931. 239 p. 8° (Bibliothèque économique universelle, 8).

41) [I. S 2]

Société des nations. Institut international de coopération intellectuelle. [L'année 1933 de la coopération intellectuelle] Paris, The inst., 1934. 196 p. 12°.

- 42) 1枚は加盟各国のこの研究所 (I. I. C. I.) への拠出金一覧 (32年から34年まで) で、横に「日本側の協力を得て日本文化紹介事業を始めたく種々苦心致居候へど中々思ふ様に交渉進捗致さず困惑致居候」とある。もう1枚は研究所の幹部職員19人の名簿で、日本人の名はそのうちの *Secrétaires* 11人の中に J. SATO がある。この佐藤が記したものか。2枚目には、「以上の職員は佛國政府より外交官の特権と免除を与へられ居候」「此他事務職員約三十名」とある。

なお、前年の33年に日本は国際連盟を脱退していたが、参考として『日本外交史辞典』の「国際連盟脱退」の項の一部を引用すると、「日本は結局脱退に踏み切ったが、それは後髪をひかれる思いで連盟から訣別したのである。実質的には、日本は政治的性質をおびた機関には参加協力しないが、平和的専門機関との協力は脱退とは関係なく継続するというものであり、その方針は38年11月まで続いたのである」。

43) [I. I 2]

[Société des nations.] Institut international de coopération intellectuelle: L'adoption universelle des caractères romains. Paris, The inst., 1934. 197 p. 8°.

宛名はこうある。

Monsieur le Prince K. SAIONZI,
OKITSU (Japon)

- 44) Le 24 juillet 1929, au cours de la onzième session de la Commission internationale de Coopération intellectuelle, le professeur Tanaka attira l'attention des membres de la Commission sur l'importance de l'unification de l'écriture pour le rapprochement du monde intellectuel de l'Occident avec celui de l'Orient.

- 45) 同書別巻一 p. 173.

4. 歴史, 伝記, 外交

直接に「時局」をあつかった著述だけでなく、各国の近代史を概観する歴史書も備えられている。パスケ『アメリカ国民の政治および社会史』¹⁾ (1924)、ジャック・バンヴィル (1879-1936) の代表作『フランス史』²⁾ 全2巻 (1926)。前者はアメリカ大使からの寄贈である。

歴史書というより、伝記への興味が加わるが、ウイルヘルム 2 世の『わが生涯の記 (1859-1888)』³⁾ (1926) も、回想の主とドイツ公使時代に接しただけに、第3項で触れたビューローとの書簡集とともに一読したいものであったに違いない。ガブリエル・アノトー『わたしの時代』⁴⁾ (1933-38) は、フランス百年史と言ってよいものである。著者は西園寺旧知の元外交官、文筆家。ふたりは年令も近く、いずれも91歳の長寿をまっとうした。著者の伝記と重ねあわせた叙述であるから興味はひとしおであったろう。

さらには、逸話中心の年代記にも大きな古典が蔵されている。定評ある『バルビエの日記 摂政時代およびルイ15世の治世の年代記』⁵⁾ (1718-1763) 全6巻 (1866) で、古書でとのえられている。どの程度に読まれたものか……。ナポレオン 1 世をめぐる史料として、1920年代に発見され

話題になった、キールマンスエッグ伯爵夫人（1777-1863）の『回想録』⁶⁾のフランス語訳全2巻（1928）も収まっている。ザクセン生まれの、この女性はナポレオンを崇拜し、そのためにさまざまな役割を演じた。補遺にナポレオンの書簡などが付されている。本文中に色鉛筆の跡があるが、ナポレオンに関するものではなく、タレーランの悪徳ぶりに関心が示されている。

外交という仕事に西園寺が晩年まで関心を失わなかったことも蔵書からうかがえる。フランソワ・ドゥ・カリエール（1645-1717）といえば、『外交談判法』（De la manière de négocier avec les souverains（Paris, 1716））が外交術の古典として知られるが、それに並ぶ、もうひとつの著作『社交の学と、処世に役立つ知識』⁷⁾（1717）が蔵されている。初版本であり、陶庵公の蔵書のなかでは数少ない18世紀の刊本である。これは公の外交官時代に求められたものではなく、文庫の収書の推定時期からして、ずっと後年に購われたのであろう。

パリ大学教授アンリ・オゼール編集の2巻の大著『ヨーロッパ外交史（1871-1914）』⁸⁾（1929）はみずからの壮年期の日々をふりかえりつつ読んだことであろう。最晩年の時期のものだが、フランス外務省の内幕を描いたポール・アラール『オルセー河岸 歴史とスタッフなど』⁹⁾（1938）はエッセー風の読物である。西園寺の興味をそそる一本であったことと思われる。

哲学思想というか、思弁的な形而上学への関心は西園寺に一概に乏しいと言えるであろう。陶庵文庫の洋書にもわずかに2著者の著書を数えるのみである。ひとつは、ロンドンで出た英語の本で、フレデリック＝ヒュー・ケイプロン（1857-?）『真理の解剖』¹⁰⁾（刊行年なし）と『真理の葛藤』¹¹⁾（1902）。いまひとつは、ジャウォルスキーというポーランド名前の著者にルネ・ダバディーが協力したという、フランス語での2部作全5冊『生物学次元』¹²⁾（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ）ならびに『社会の次元』¹³⁾（Ⅰ、Ⅱ）（1917-18）のうちの最初4冊である。いずれも同著者の著作を複数揃えているから、しかるべき関心にもとづく架蔵のはずだが、ふたりの著者ともこれらが著作のほとんどすべてで、また、著者についての思想史的な言及はどこにも見当たらない。人から寄贈されたものならともかく、西園寺がどういう脈絡でこれらの図書に興味を覚えたか計りかねる。

さらに、手元の辞書あるいは宝典として、書見のおりふしに参看されたと思われる諸本をここにあわせて記すことにする。まず、『フランスおよび外国総合年鑑1919年版』¹⁴⁾（1919?）は1222ページの部厚い便覧で、まことに便利そうである。アネットお祖母さんなる著者名で、生活の心得を説ききかせる体の『生活宝典』¹⁵⁾（1911）は巷間よくある、日常あるいは社交生活手引書のなかでは本格的である。大判のうえに、補遺を加えて1000ページ近い大冊。上流社会だけでなく、あらゆる階層を対象にしている、この時代のフランス人の生活資料ともなりうるものである。西園寺文庫にもこうした手引書は見当たったが、もちろん時代の推移にあわせて買いととのえられたのであろう。そのほかラルースの『フランス語語源一覧辞書』¹⁶⁾は、西園寺文庫とおなじ第7版がある。書齋の主には座右に欠かせぬものであったのか。どこにもあるプチ・ラルースや『ヴェルモ年鑑』（1928年版）は言うまでもない。

つまり、西園寺の読書はもちろん専門家のそれだけでなく、自分の好尚にしたがったに過ぎないけれども、基礎的な参考図書類の用意は十分にあると言える。

1) [III. P 2]

Pasquet, D. : *Histoire politique et sociale du peuple américain*. Paris, Picard. 1924. 410 p. 8° Tome 1 : Des origines à 1825.

2巻本の1巻目のみ。つぎの献呈辞がある。

His Excellency
Prince Saionji
with the compliments of
Charles MacVeagh
September 1927

チャールズ・マックヴィーは駐日アメリカ大使。在任期間は25年12月から28年12月まで。

2) [III. B 1]

Bainville, Jacques : *Histoire de France*. Paris, Jules Tallandier. 1926. 2 vol. — T. 1 : 310 p. — T. 2 : 284 p. (Bibliothèque "Historia").

3) [III. G 4]

Guillaume II : *Souvenir de ma vie (1859-1888)*. Ouvrage traduit de l'allemand. Paris, Payot. 1926. 443 p. 8° (Collection d'études, de documents et de témoignages pour servir à l'histoire de notre temps).

4) [III. H 2]

Hanotaux, Gabriel : *Mon temps*. Paris, Plon. 12° 2 vol. — T. 1 : De l'empire à la république. 1933. 354 p. — T. 2 : La troisième république, Gambetta et Jules Ferry. 1938. 531 p.

5) [III. B 2]

Barbier, Journal de. : *Chronique de la régence et du règne de Louis XV (1718-1763)*. Paris, Charpentier. 8 vol. 1866. 16°.

6) [II. D 1]

Delage, Joseph. édité par : *Mémoires de la comtesse de Kielmannsegge sur Napoléon I er. D'après le manuscrit original des archives du comte Guerrino zu Lynar*. Ouvrage traduit de l'allemand, par Joseph Delage. Paris, Victor Attinger. 1928. 8° 2 vol. — T. 1 : 207 p. — T. 2 : 214 p.

図書カードに刊行年が1938とあるのは誤り。

7) [I. C 1]

François de Callières : *De la science du monde, et des connaissances utiles à la conduite de la vie*. Paris, Etienne Ganeau, 1717. XVII. 310, 5 p. 16°.

ただし、フランス国立図書館のカタログには、その後の版の記載はない。

8) [III. H 3]

Hauser, M. Henri. éd. : *Histoire diplomatique de l'Europe (1871-1914)*. Paris, Les Presses universitaires de France. 1929. 8° T. 1 : 476 p. — T. 2 : 389 p. (Manuel de politique européenne).

9) [I. A 2]

Allard, Paul : *Le Quai-d'Orsay. Son histoire, son personnel, etc.* Paris, Les Editions de France. 1938. 234 p. 12°.

ポール・アラールの名では古代キリスト教史家 (1941-1916) が有名だが、こちらは1930年代から40年代初頭にかけて政治経済関係の著作を残している。

10) [I. C 4]

Capron, F [rederick] Hugh : *The anatomy of truth*. 2nd and rev. ed. London, Hodder and Stoughton. [n. d.] 344 p. 8°.

- 11) [I. C 5]
 Capron, F (rederick) Hugh : The conflict of truth. 7th ed. London, Hodder and Stoughton. [1902] 518 p. 8°.
- 12) [I. J 3] [I. J 4] [I. J 5]
 Jaworski, Hélan, avec la collaboration de René d'Abadie : Le plan biologique. Paris, A. Maloine et fils. 12° 3 vol. — I : L'intériorisation. 1917. 254 p.— II : L'arbre biologique, sa signification. 1918. 384 p. — III : La période géologique, sa signification, la naissance. 1918. 176 p. (Un pas dans l'essence des choses, 1, 2 et 3)
- 13) [I. J 1]
 Jaworski, Hélan : Le plan social. Paris, A. Maloine et fils. 1918. 12° — I : L'humanité, sa croissance. (Un pas dans l'essence des choses, 4)
- 14) [I. A 3]
 Annuaire général de la France et de l'étranger. Pour l'année 1919. Paris, Comité du livre. 1919. 1222 p. 12°.
- 15) [I. A 4]
 Annette, Grand'Mère : Le code de la vie. Paris, Administration. 1911. 887 p. supplément 95 p. 4°.
- 12) [V. S 1]
 Stappers, Henri : Dictionnaire synoptique d'étymologie française, donnant la dérivation des mots usuels. 7e éd. Paris, Larousse. [Sans date] 959 p. 12°.

5. 日本に関する図書

27部を数える¹⁾。寄贈が多いと思われるが、まったく関心外と思われる図書も、寄贈者の好意を重んじてか保存されている。西園寺文庫でもそうであったが、外国語による日本研究の著述は、心して残されているようである。

まず日本人による著書のうち主なものを挙げると、小林照朗（てるあき）著、吉田ジュンキチ訳『日本の社会—社会学的研究²⁾』（1914）、箕作佳吉（かきち）著『日本の社会生活³⁾』（宮島幹之助発行）（1922）。いずれも、日本社会の実情の紹介を目的に出版されたものと思われる。前者は東京帝大社会学講座の初代教授の建部遯吾（たけべ・とんご）（1871-1945）の序文がつき、日本の草創期社会学の水準を示すものであろう。しかし、後者は著者、発行者とも動物学者であって、しかも物故した著者の名で出されている。出版の子細がよくわからない。

22年春には、グラン・パレのボザールのサロンで「日本美術展覧会」がおこなわれたが、その図録⁴⁾が収まっている。この展覧会は近世から近代の日本美術を絵画彫刻工芸と概観したもので、海外での企画として有数の規模であった。出品の例を絵画について示すと、探幽、直庵、山雪、又兵衛、師宣、光琳、乾山、若沖などから、栖鳳、松園に及ぶ。図録は在仏のだれかから届けられたものであろうが、意外にもナイフが入っていない。

『星一氏ノ後援ニ依ル獨逸人ノ化學ニ關スル學術的研究⁵⁾』（1924）は、ドイツで出されたドイツ語の論文集。インフレーションに悩む戦後ドイツ科学界のための出版援助で、三方金の立派な造本である。ステニルベール・オベルラン、岩村ヒデタケ（英武？）共訳『芸者の唄⁶⁾』（1926）は、うた沢の初めての紹介。フジタの水彩が付されて洒脱なものである。西園寺にとっては、これあ

るかなという一本であったろう。

美術書で邦文に英語訳を併記したものに、福井菊三郎（1866-1946）『日本陶磁器と其国民性⁷⁾』（1927）がある。福井菊三郎は三井合名会社理事、三井物産その他の取締役を勤めた財界人。講和会議出席の際も実業家代表として随員に加わっている。この著作は東京での講演をもとにしており、1926年の初版の増補版である。おそらく、先輩の益田鈍翁あたりの感化もあるであろうが、素人として書いたと著者自身が言っているように、記述はむしろ異色で、茶道愛好家一般とはことなつた、ひろやかな目を感じられる。とくに披見のあとはないが、知人でもある、そうした研究家の手になる、2カ国語による手頃な陶芸概説として取っておかれたのであろう。著者はのちの1934年にも講演をおこない、それを別書『陶磁芸術の人間的要素』にまとめ、国際文化振興会から英仏西の3国語で刊行している。

織田萬の大著『日本行政法原理⁸⁾』（1928）は西園寺に近い人物のものゆえ、もちろん献上である。中央大学からの寄贈は、伊藤博文『憲法義解』の、伊東巳代治による英訳⁹⁾（1931）である。西園寺にとっては、博文の憲法調査に随行した、まだ若い日の思い出と切り離せない品であろう。

30年代に入って戦雲がただよってきたことを、紫雲荘発行の英文小冊子『日本の皇道外交¹⁰⁾』（1934）は感じさせる。紫雲荘なる団体を主宰した政治評論家の橋本徹馬（てつま）は、旧政友会につながる開明派の右翼であつたらしく、おそらく西園寺も見知っていた人物であつたのであろう。

フランス派の日本人学者による刊行物もいろいろ挙げられる。なかでの代表格の姉崎正治（筆名嘲風）のパリ大学での講演『日本文明の現在の危機¹¹⁾』（1935）と、日本論とも言うべき著書『日本の芸術、生活、自然¹²⁾』（1938）。姉崎の文章はそのほか『世界周遊協会雑誌¹³⁾』〔とでも訳すべきであろうか？〕にも、講演「日本における宗教団体の現状」が収められている。多方面に活動した、この学者と西園寺は交際もあり、その著書は和洋さまざまに蔵されている。

あるいは、杉山直治郎『わたしのフランスでの任務、1934年。講演と談話¹⁴⁾』（1936）。法曹関係ではさらに、杉山の師であり、日仏会館館長であつた人を追悼するために日仏の学者によって編まれた、2カ国語版の冊子『アンリ・カピタン教授追悼講演集¹⁵⁾』（1938）と、これに呼応してフランス側で編纂された『富井男爵、カピタン教授への頌辞¹⁶⁾』（1939）とが架蔵されている。

文芸では、松尾邦〔之助〕、ステニルベール・オベルラン訳『芭蕉とその弟子たちの俳諧¹⁷⁾』（1936）。これもフジタの挿絵が入る。俳句を好んだ陶庵公の好尚に投じたにちがいない。そのほか、東京の国際文化振興会が発行した『仏伊西葡語 日本関係図書略書誌¹⁸⁾』（1936）は、簡にして要を得た重宝な手引と見える。

ついで、フランス人による著述を挙げると、元の駐日大使オギュスト・ジェラルールによる『わたしの日本での任務¹⁹⁾（1907-1914）』（1919）。さらに、当時の大使ポール・クロードルの小冊子『燃えさかる都市のあいだを。実見録²⁰⁾』（1924）は、大震災の翌年に刊行された。

日仏の間の歴史文書だが、フランス側から贈られた写真版がある。安政6年己未8月26日に取り交わされた条約の日本語正文である。表紙に「パリの大学都市がその日本人の友に贈る」とある。刊行年の記入がないが、添えられた呈辞の日付からすれば33年か。書面には「源家茂」の署名と「経文緯武」四文字の大きな朱印、さらに外国事務老中などの署名もついで美々しいが、門

外の筆者に文書の意義は量りかねる。

在日のフランス人による、いくつかの著書は日仏文化交流の実を示している。日本の詩歌の訳書であるジョルジュ・ボノー『日本的感性²²⁾』(1934)、ノエル・ヌエット『東京スケッチ五十景²³⁾』(1935)、関西日仏学館新館竣工を記念したルイ・マルシャン『京都の日仏学館新館 仏日の知的交流史に資するための資料²⁴⁾』(1937)などである。

しかし、外から日本を見るとき、その国際的な地位の危うさが観察者の眼をまず引かずにはいない。モリス・ラシャン『日本1934年²⁵⁾』(1934)、アルバート・ハインドマーシュ『日本とアジアの平和²⁶⁾』(1937)、クロード・ファレル『アジアにおけるヨーロッパ²⁷⁾』(1939)といった著作である。

1) 文芸, 美術に属する図書でも, 日本に関わるものはこちらに含めての数字である。

2) [I. K 1]

Kobayashi, Teruaki: *La société japonaise, étude sociologique*. Ouvrage traduit du japonais par Jukichi Yoshida, avec le concours de Mme Laudenbach, sous le contrôle de l'auteur. Paris, Félix Alcan. 1914. 223 p. 8° (Bibliothèque d'histoire contemporaine).

原著は『日本之社会』(東京, 金港堂。初版1907年。〈社会学論叢第2巻〉)であろう。

3) [I. M 7]

Mitsukuri, K [akichi]: *La vie sociale au Japon*. Ouvrage publié par Mikinosuké Miyazima *sic*. Paris, Société franco-japonaise de Paris. 1922. 147 p. 12°.

体系的な日本社会論である。巻中, 著者の写真に添えて「(1857-1909) 動物学教授」とあり, その略歴の紹介がある。「東京帝国大学において1882年から1909年まで。1901年から07年まで理学部長」。箕作佳吉は秋坪の三男。元八の兄にあたる。阮甫は母方の祖父。フランス法の大家麟祥は母方の従兄。

序文を宮島が書き, 巻末に「日本における阿片悪用とその撲滅」を執筆している。宮島幹之助(1872-19?)は慶大医学部教授。国際連盟保健委員会の日本代表委員, また国際阿片会議専門委員であった。

4) [IV. S 1]

Société nationale des beaux-arts: *Exposition d'art japonais au Salon de la Société nationale des beaux-arts du 20 avril au 30 juin 1922*. Paris, Editions de l'Abeille d'or. 1922. 48 p., 72 pl. 12°.

5) [I. D 3]

Deutsche wissenschaftliche Untersuchungen auf dem Gebiete des chemie, ausgeführt mit Unterstützung von Hajime Hoshi. Leipzig, Verlag Chemie. 1924. 620 p. 8°.

ドイツ語の書籍だが, わずかに本文に示した表題が扉に日本語で大きく印刷されている。中に葉書大の紙片が入っており, 「獨逸科學相扶會 (Notgemeinschaft der deutschen Wissenschaft)」の代表者名による, 印刷された呈辞がある。

6) [II. C 1]

Chansons des geishas. Ouvrage traduit pour la première fois du japonais, par Steinilber-Oberlin (E.) et Hidetaké Iwamura. Aquarelles et vignettes de Foujita. Paris, G. Crès. 1926. 192 p. 12° (Les heures légères, 3).

7) [IV. F 1]

Fukui, Kikusaburo: *Japanese ceramic art and national characteristics*. Tokyo, K. Ohashi. 1927. 63, 51 p. 63 pl. 8°. [邦文併記] 日本陶磁器と其国民性, 東京, 大橋光吉, 昭和2年。

なお, 後年に出版されたもう1冊の著書を, 読者の参考のために *The National Union Catalog Pre-1956 Imprints* をそのまま引き, フランス語版によって紹介すると

Les éléments humains dans l'art céramique, par Kikusaburo Fukui. Traduit de l'anglais par Jean-Pierre Hauchecorne. Tokyo, Japon, Kokusai bunka shinkokai (Société pour le développement des relations culturelles internationales) 1936.

2 p. l., 3-40 p. incl. 20 pl. 22 cm. ([Kokusai bunka shinkokai, Tokyo. K. B. S. publications. Series-B, no. 30]).

“Cette brochure renferme le compte-rendu de la conférence faite en novembre 1934, au Tokyo women's club, par M. Kikusaburo Fukui...”

8) [I. O 1]

Oda, Yorodzu : Principes de droit administratif du Japon. Paris, Recueil Sirey. 1928. 601 p. 8°.

献辞にはこうある。

<p>A Monsieur le Prince Saionji en hommage de haute estime et de sincère dévouement. Y. Oda</p>	<p>(訳文) 西園寺公 深甚なる敬意と 心よりの忠誠のしるしに 織田萬</p>
---	--

織田(1868-1945)は行政法が専門で、これに関わる著書が多い。のちに日本で出版される『日本行政法原理』(有斐閣, 1934, 674 p.)の序の冒頭で織田は「本書は佛文拙著 Principes de droit administratif du Japon の翻譯とも謂ふべきものである」と述べ、その原著執筆のいきさつにも触れている。

9) [III. I 11]

Ito, Hirobumi : Commentaries on the Constitution of the Empire of Japan. by Prince Hirobumi Ito, translated by Count Miyoji Ito. 3rd edition. Tokyo, Chu-o Daigaku. 1931. 300 p. 8°. [東京中央大学, 昭和6年]

奥付によると、初版明治22年, 再版明治39年。扉に「西園寺公爵閣下 中央大学敬呈」とある。

10) [I. S 6]

Shiunso : Kodo Diplomacy of Japan : on American-Japanese problems and naval conference. Tokyo, Shiunso. 1934. 63 p. 16°.

11) [I. M 4 sic]

Anesaki, Masaharu : La crise actuelle de la civilisation au Japon. Paris, Université de Paris. 1935. 18 p. 8° (Institut d'études japonaises, Travaux et conférences, fasc. 3).

パリ大学の日本研究所はパリの大学都市日本館におかれていた。

12) [IV. A 1]

Anesaki, Masaharu : L'art, la vie et la nature au Japon. Paris, Institut international de coopération intellectuelle. 1938. 153 p. 8° (Collection japonaise, no 2).

出版者である、この研究所は後出の『芭蕉とその弟子たちの俳諧』も同叢書で刊行している。研究所については、「3. 国際情勢をめぐる図書」註42)を参照。

13) [I. B 1]

Bulletin de la Société autour du monde. Boulogne-sur-Seine, Sociales et Politiques. 8° No unique : 14 juin 1931. 17e année (1930).

姉崎論文のフランス語題名は Etat présent des associations religieuses au Japon. 雑誌の註記によると、この論文は姉崎が1930年ロンドンで出版した大著 History of Japanese Religion の結論部分を紹介したもの。

14) [V. S 2]

Sugiyama, Naojiro : Ma mission en France, 1934 : conférences et allocutions. Tokyo, La Maison

franco-japonaise. 1936. 251 p. 4°.

謹呈 杉山直次郎 の紙片がある。杉山は東京帝国大学法学部教授。ページは切られていない。

15) [I. H 1]

東京, 日本佛語法曹会 日仏会館 日仏協会, (比較法学叢書 1)。

16) [III. S 2]

Société franco-japonaise de Paris : Hommage au baron Tomii et au professeur Capitant. Paris, Recueil Sirey, 1939. 47 p. 8°.

「富井男爵」は法学者で、西園寺とも親しかった富井政章（1858-1935）である。
ページは切られていない。

17) [II. B 3]

Basho [Matsuo] : Haikai de Bashô et de ses disciples. Ouvrage traduit du japonais par Kuni [nosuké] Matsuo et Steinilber-Oberlin. Illustrations de Foujita. Paris, Institut international de coopération intellectuelle. 1936. 145 p. 6 illus. 8° (Collection japonaise, 1).

18) [II. K 1]

Kokusai Bunka Shinkokai : Bibliographie abrégée des livres relatifs au Japon, en français, italien, espagnol et portugais. Tokyo, The society Kokusai Bunka Shinkokai. 1936. 50 p. 12°.

19) [III. G 3]

Gérard, A [uguste] : Ma mission au Japon (1907-1914). Paris, Plon-Nourrit. 1919. 412 p. 8°.

巻中 4 枚の写真を含む。巻頭が西園寺のそれで、Saionzi *sic* というローマ字の自署らしいものが写っている。他の 3 枚は、伊藤博文、小村寿太郎、牧野伸顕。

ジェラルドの在任期間は公式には1913年11月までである。

他のもう 1 冊 [III. G 2] は、ページがほとんど切られていない。

20) [III. C 4]

Claudé, Paul : A travers les villes en flammes ; notes d'un témoin. Paris, Gallimard. 1924. 42 p. 16° (Les amis d'Edouard, no 62).

クローデルによる献呈の辞がある。

<p>A son Excellence le Prince Saionji hommage respectueux P. Claudel</p>	<p>(訳文) 西園寺公閣下 謹呈申し上げます P. クローデル</p>
--	--

M. とまず書いて son と書き直した跡が見える。ためらった挙句、より儀礼的な宛名にしたものか？

この本は200部限定の31番。

クローデルの在任期間は、1921年12月から27年 2月。

21) [II. F 1]

Traité d'amitié perpétuelle entre la France et le Japon. (Protocole de ratification du 18 septembre 1859) La Cité universitaire de Paris à ses amis japonais. [Sans lieu ni date] 5 p. 4° [内容邦文].

『維新史料綱要 巻三』の安政 6 年 8 月 26 日の条に「外国奉行酒井忠行、佛國總領事「ドゥ・ベルクール」ト會シ、条約本書ノ交換ヲ了ス」とある。それは、その半月前、同書 8 月 10 日の条に「佛國總領事「ドゥ・ベルクール」de Bellecourt、軍艦「デュ・シヤイラ」ニ搭ジテ品川ニ來リ、幕府ニ条約本書ノ交換ヲ求ム」とあるのにつながる（以上、平山弓月氏の親切な教示を受けた）。ところで、上のように図書カードにある1859年9月18日の日付が何に基づいているのかわからないが、安政 6 年 8 月 26 日は太陽暦で 9 月 22 日のはず。また、日本文はつながらず一部脱落があるように思われる。

扉につぎのような呈辞があるが、署名が筆者には判読できない。

<p>à S. E. le prince Saïonji, qui lui dira mieux qu'une lettre le souvenir fidèle que lui gardent tous les Français Tokyo, 25 octobre 1933 (.....)</p>	<p>(訳文) 西園寺閣下 閣下にフランス国民すべてが抱 く敬愛の情をこの文書ほどによ く伝えるものがありましょ うか 東京, 1933年10月25日 (.....)</p>
--	---

- 22) [II. B 4]
Bonneau, Georges : La sensibilité japonaise. 2e éd. Tokyo, L'auteur. 1934. 395 p. 8°.
- 23) [III. N 2]
Nouët, Noël : Tokyo : fifty sketches ; cinquante croquis. Tokyo, Japan Times & mail. 1935. 16 p. 50 pl. 4°.
- 24) [V. M 1]
Marchand, Louis : Le nouvel Institut franco-japonais de Kyoto : documents pour servir à l'histoire des relations intellectuelles franco-japonaises. [邦文併記] Kyoto, Société de rapprochement intellectuel franco-japonais. 1937. 95, 74 p. 4°.
ルイ・マルシャン著, 宮本正清訳 関西日仏学館新館 (京都, 日仏文化協会)。
- 25) [III. L 2]
Lachin, Maurice : Japon 1934. 5e éd. Paris, Gallimard. 1934. 252 p. 12°.
- 26) [III. H 1]
Hindmarsh, Albert E. : Le Japon et la paix en Asie. Paris, Recueil Sirey. 1937. 102 p. 8°.
- 27) [III. F 1]
Farrère, Claude : L'Europe en Asie. Paris, Flammarion. 1939. 101 p. 12°.

6. 文芸, 美術, その他

文芸においては, まずギリシャ, ローマの古典のフランス語訳が手頃な版で揃えられていることを記しておこう。西園寺文庫には, ラテン語版ではパイドロス『寓話』, フランス語版ではルコント・ドゥ・リール訳の『イリアッド』『オディッセイ』の3冊のみであった。ここには, ブリュモワ訳『ギリシャ演劇』¹⁾全16巻(1826), キケロのクラシック・ガルニエ版全集²⁾全20巻(1870), 同じ版でプルタルコス『英雄伝』³⁾全6巻(1927)が揃っている。ギリシャ演劇とキケロ全集もおそらく晩年期に古書で購入されたものであろう。

フランス文学については, 古典は皆無に近い。コルネーユの『ル・シッド』⁴⁾(刊行年なし)は, 48°という豆版の珍しさゆえに丸善で購入されたに過ぎないだろう。あとは, 作者不明の『恋愛の辞典』⁵⁾(刊行年なし。造本から19世紀初頭かと思われる)と, バルザックの『風流滑稽譚』2巻(1926年版)くらいである。前者は, あるいは内容の見当のつかない題名に牽かれて手に入れたものか。恋愛心理の綾についての, なかなか興深いエッセー集であって, フランス・モラリスト文学の系譜につながるものと言えよう。

その他は現代の文学だが, 数はわずか9冊である。人から届けられたものもあるが, 西園寺の好みもやはり窺われる。たとえば, ジュール・ラフォルグの『ふざけ者のピエロ』⁶⁾(1927年版)は,

まことに人を食った小喜劇である。限定207部、マルタンの版画の入った美本で、収集家には垂涎的のちにちがいない。

アンリ・ラヴダンが2部。『かれらの素晴らしい肉体⁷⁾』（1896）、『上流社会⁸⁾』（刊行年なし。第20版）。いずれも対話体の軽妙なもので、パリの当世風俗をうがっている。いずれも読み古しており、おそらくは以前から手元にあったのであろう。ラヴダンは西園寺文庫にもやはり2部あり、お気に入りの作家であったと思われる。モリス・マンドロンの歴史小説『サン＝サンドル⁹⁾』（1926年版）も好みにあうものと思うが、どういう次第で西園寺の手に入ったのであろうか？

シャルル・プリニエの小説『偽の旅券¹⁰⁾』（1927）には橋本實斐の名刺がはさまれており、寄贈である旨がわかる。そのほか、ジュール・ロマンの戯曲集¹¹⁾（1925年版）（23年に大当りをとった『クノック』、および『ル・トゥルアデック氏』を取めている）、ピエール・マコルラン『悪意¹²⁾』（1924）、モリヤック『テレーズ・デスケルー¹³⁾』（1935年版。初版は27年）などは評判のものが収まっているが、みずから取り寄せたか、どこかから届いたか定めがたい。

西園寺が若年のころにゾラを好んで読んだことはよく語られるが、その小説の原書は西園寺文庫にも陶庵文庫にも見当たらない。

美術関係の書籍も数は多くないが、おなじ版元から出て、いずれも近い時期に購入された3種の大型本がある。ルイ・ディミエ、ルイ・レオー『フランス絵画史¹⁴⁾』（起源から18世紀まで、全5巻）（1925-1927）、アンリ・クルーズ『ジュエ工場と18世紀フランス捺染織物の歴史¹⁵⁾』全2巻（1928）、ルモワヌ『国立図書館版画室所蔵、14世紀、16世紀の木版画¹⁶⁾』全2巻（1927-1930）。もちろん、それぞれ堂々たる著作で、ことにルモワヌのそれは、すべて色刷の図版を別刷で貼った、当時としては稀な出版である。しかし、これらはみな、いわば参考までに手元においたに過ぎないであろう。

ほかには、1914年のサロンの図録とレオン・ウェルト『クロード・モネ¹⁷⁾』（1928）だけである。後者はモネがクレマンソーの親友であったことから手に入れたのだらうが、閲覧の跡はない。西園寺は和漢の書画にはおおいに関心があり、各地の諸家の所蔵品入札目録などが多数西園寺文庫に残されているが、西洋美術については、所蔵の洋書と書に見るかぎり、さしたる興味はなかったように思われる。わずかに、西園寺文庫の庭園や室内装飾に関わる数冊を見るばかりである。

西園寺のバリ懐古の情を慰めたかと思われる図書数点がある。図版がたっぷり入った大型本『1800年から1900年のパリ¹⁸⁾』全3巻と、これの続巻である『パリ100年回顧 19世紀を通したパリ生活展望¹⁹⁾』。いずれも、本作りに達者なシャルル・シモンの編集である。

もうひとつは、1840年代に出されたものだが、やはり大著の『かれら自身によって描かれたフランス人 19世紀風俗百科²⁰⁾』全8巻である。著者名がないが、これは多数の作家、挿絵画家の合作である。巻ごとに顔触れはことなるが、文と絵それぞれ錚々たる名がつけられている。文は、バルザックを初めとして、ゴーチエ、ジャンン、ノディエ、ゴズラン、ポレル、ルイーズ・コレ……。絵はガヴァルニ、モニエ、ドーミエ、グランヴィル……。風俗を描くとなればどれも逸せられない名である。最初の5巻がパリ編で、職業風俗のカリカチュア。あとの3巻が地方編で、職業のほかには人国記と大略まとめることができる。だれしものが興をそそられる、この著作はもちろん軽文学の一大集成ではあるのだが、西園寺にとっては文芸作品というより、やや時代のずれ

はあっても、みずからのバリ時代回想のよすがとして繙読したものにちがいない。

陶庵文庫のはこり叩きの最後に、ひきだしの奥から出てきたような1冊をまったくの蛇足としてつけくわえる。骨相学が流行した19世紀初頭²¹⁾に出版された、匿名の de G***** 夫人『共感。または、顔の表情によって、恋愛友情における相性を判断する術』(1813)である。西園寺文庫にも骨相学の本数冊があったが、この執心にはいささか戸惑わされる。

1) [II. B 1]

Théâtre des Grecs. Ouvrage traduit par Pierre Brumoy; 2e éd. complète, revue, corrigée et augmentée d'un choix de fragmens des poètes grecs, tragiques et comiques, par Raoul Rochette. Paris, Brissot-Thivars. 1826. 16 vol. 8°.

ブリュモワ(1688-1741)はジェジュイット僧の学者。1730年初版の、これが主著で、ギリシャ劇を一般の読者が近づけるものにした。ロシェットが、この第2版で大幅に増補した。

2) [II. C 3]

Cicéron, Marcus Tullius: Oeuvres complètes de Cicéron. Paris, Garnier. 1867-70. 20 vol. 12° (Classiques Garnier).

訳者名は巻により異なるので省略した。

3) [II. P 1]

Plutarque: Les vies des hommes illustres. Ouvrage traduit par Dominique Ricard. Nouvelle éd. Paris, Garnier. 1927. 6 vol. 12° (Classiques Garnier).

リカール(1741-1803)は僧侶。とりわけプルタルコスの新訳で知られ、その訳は長く読まれた。ほかに、おなじ版で第1、6巻のみがある[V. P 1]。

4) [II. C 4]

Cornille, Pierre: Le Cid. Paris, Nelson. [Sans date] 208 p. 48°.

5) [I. D 1]

Dictionnaire d'amour. Paris, Chaumerot Jeune. [Sans date] 235 p. 16°.

6) [IV. L 1]

Laforgue, Jules: Pierrot fumiste. Gravures de Charles Martin. Paris, Emile-Paul. 1927. 44 p. 4°.

図書カードは刊行年について[n. d.]としているが、1927年。

初版は作者死後の1903年で全集第3巻の *Mélanges posthumes* 所収。

7) [I. L 1]

Lavedan, Henri: Leur beau physique. Paris, Calmann-Lévy. 1896. 311 p. 12°.

8) [III. L 3]

Lavedan, Henri: La haute. 20e éd. Paris, Calmann-Lévy. [Sans date] 326 p. 12°.

初版は1891年。フランス国立図書館の目録には、第16版1895年の記載があり、この版の刊行年の見当がつく。

9) [II. M 1]

Maindron, Maurice: Saint-Cendre: roman. Paris, Charpentier et Fasquelle. 1926. 455 p. 12°.

10) [II. P 2]

Plisnier, Charles: Faux passeports. Paris, R. A. Corrêa. 1937. 389 p. 12°.

名刺の表にこうある(原文は縦書)。

御機嫌御伺 別書（ゴンクール賞受領） 御慰迄ニ高覧ニ供候 叔父上様
--

- 11) [II. L 1 sic]
Romains, Jules : Knock / M. Le Trouhadec. 22e éd. Paris, Gallimard. 1925. 249 p. 12°.
図書カードは作者名、書名が混乱している。
- 12) [I. O 2 sic]
Mac Orlan, Pierre : Malice. Gravures de Chas Laborde. Paris, Henri Jonquières. 1924. 245 p. 8°.
- 13) [II. M 3]
Mauriac, François : Thérèse Desqueyroux : roman. Paris, J. Ferenczi. 1935. 156 p. 8° (Le livre moderne illustré, 65).
初版は1927年。
- 14) [IV. D 1]
Dimier, Louis : Histoire de la peinture française. Paris, G. Van Oest. Contenu — Des origines au retour de Vouet, 1300 à 1627. 89 p. 64 pl. 1925. — Du retour de Vouet à la mort de Lebrun, 1627 à 1690. T. 1 : 1926. — T. 2 : 1927.
Réau, Louis : Histoire de la peinture française. Paris, G. Van Oest. Contenu — Au XVIIIe siècle. T. 1. 91 p. 64 pl. 1925. — T. 2 : 97 p. 60 pl. 1926.
図書カードでは、全5巻の構成がややわかりにくいので、上記のように記述をあらためた。すなわち、Histoire de la peinture françaiseの総題のもとに2人の著者が執筆している。デイミエ担当の最初3巻中の、第2、3巻は同題名。レオー担当の第4、5巻は同題名。
- 15) [IV. C 1]
Clouzot, Henri : Histoire de la manufacture de Jouy et de la toile imprimée en France au XVIIIe siècle. Paris, G. Van Oest. 2 vol. : Planches 87 pl. et Texte 205 p. 1928.
- 16) [IV. L 2]
Lemoine, P [aul] A [ndré] : Les xylographies du XIVe et du XVIe siècle au cabinet des estampes de la Bibliothèque nationale. Paris, G. Van Oest. Contenu — 2 vol. — T. 1 : 176 p., 62 pl. 1927. T. 2 : 148 p. 63-130 pl. 1930.
- 17) [IV. W 1]
Werth, Léon : Claude Monet. Paris, G. Crès. 1928. 43 p. 73 pl. 4°.
- 18) [III. S 6]
Simond, Charles : Paris de 1800 à 1900. Paris, Plon. 4° 3 vol. T. 1 : 1800-1830. 676 p. 1900. — T. 2 : 1830-1870. 765 p. 1900. — T. 3 : 1870-1900. 646 p. 1901. (La vie parisienne au XIXe siècle)
シャルル・シモンは本名 Van Cleemputte (Paul Adolphe)。たいへんな多作家であったこの人は、ほかに Pierre Durandal, Paul Largillière の名でも著述を残している。
- 19) [III. C 11 sic]
Simond, Charles : Les Centennales parisiennes, panorama de la vie de Paris à travers le XIXe siècle. Publié sous la direction de Charles Simond. Paris, Plon-Nourrit. 1903. 192 p. 4°.
- 20) [V. F 1]
Les Français peints par eux-mêmes, encyclopédie morale du dix-neuvième siècle. Paris, L. Curmer. Tomes 1-5 : 1840-1843. — Province. Tomes 1-3 : 1841-1842. 4°.
『19世紀風俗百科』という、バルザック風の副題は第2巻以降のもの。
- 21) [I. S 1]

Mme de G * * * * *. Les sympathies, ou l'art de juger, par les traits du visage, des convenances en amour et en amitié. Avec 32 pl., représentant des figures. Paris, Saintin. 1813. 79 p. 32 pl. 24°.

〔追記〕「陶庵文庫」閲覧にあたって京都大学附属図書館の方々から示されたご好意に感謝申し上げます。また、立命館大学の西園寺公望傳編纂室に長年おられて、伝記刊行に尽力された日本近代史研究家の福井純子女史には、今回も原稿の閲読をおねがいし助言を得た。記して謝意を表したい。